

# 新保磐次『中學國文讀本』における「普通文」その2

——編者作成教材における文体的試みと三土忠造『中學國語讀本』への改変——

信木伸一

## 1、本稿のねらい

本稿は、明治期の中等教育国語教科書における「普通文」創出の実践を明らかにする研究の一環として、新保磐次<sup>\*1</sup>『中學國文讀本』（明治二八、金港堂）を取り上げる報告の続編である。

先の報告<sup>\*2</sup>では、教科書編者が作成した教材のうち典拠が確認できた「藤樹先生」を取り上げ、その典拠からの文体的変容を分析し、「普通文」創出の痕跡を析出した。また、新保「日本普通文如何」（明治二〇年六月、金港堂）における「普通文」論が、教材文の作成にどのように実現されているのかを確認した。

本稿では、中等教育国語教科書における「普通文」実践を分析する視点を抽出することを目的として、本教科書における編者作成教材の文体的な実践の特徴を析出する。

また、先の報告で取り上げた教材「藤樹先生」の本文を改変して使用したと考えられる後発の教科書の事例を取り上げて、両者の本文を比較することで、文体的変容の相を確認する。

## 2、新保磐次『中學國文讀本』における編者作成教材の文体的実践

自作の教材を収録することについて、本教科書「例言」に、次のように記されている。

毎文題名の下に、必記者の姓名又は別號を附記せり。然れども太平記源平盛衰記の如く記者不明なる者は、是に代ふるに書名を以てす。其二つの者共に記せざるは、編纂者及び友人三宅米吉氏の文なり。

右にある「記者」も「書名」も「記せざる」を、ここでは編者作成教材として扱う。編者作成教材には、卷一に「藤樹先生」・「鎌倉」・「太平洋の航海」・「望遠鏡の發明」・「英國歴遊」・「高田屋嘉兵衛」・「須磨」・「動物の色澤」、卷二に「熱海」・「有馬」・「詩仙堂」・「化學試験を奏覽する解説」、卷四に「孟子」・「松嶋」がある。このうち、「鎌倉」、「須磨」、「松嶋」は、後の教科書において、新保磐次著として教材に採られている<sup>\*3</sup>。

「望遠鏡の発明」・「動物の色澤」・「化学試験を奏覧する解説」は科学分野を話題とした説明文、「鎌倉」・「太平洋の航海」・「英国歴遊」・「須磨」・「熱海」・「有馬」・「詩仙堂」・「松嶋」は情景描写のある紀行文、「藤樹先生」・「高田屋喜兵衛」・「孟子」は説話的要素のある伝記である。

これら編者作成教材の文体的特色について、教材「藤樹先生」の典拠からの文体的変容を取り出した前回報告の結果を基に、以下(1)～(8)の観点で調査を行った。

### (1) 段落の使い方

すべての編者作成教材において、大きく話題の変わるところで、段落が分けられている。段落冒頭は一字分下げている。これは、現代では一般的なことであるが、同時期の塩井正男『中等国文』(明治三〇年、普通教育出版教科)のように、段落分けは行っていないもの、段落冒頭の一字下げを行わない教科書もある。

### (2) 一文中の句の続け方

先の報告<sup>\*2</sup>では、教材「藤樹先生」において、一文の長さに関わって、漢文体・漢文訓読体の典拠からは文を続ける改変を施し、仮名漢字交じり文の典拠からは一文を短く切る改変を施していることを指摘した。句の続け方の注目すべき特徴は、句末が終止形であると判断できる箇所を、読点で続けていることである。表1は、その出現数。

【表1】

終止形、	文種	教材題
4	科学	望遠鏡の発明
1	科学	動物の色澤
1	科学	化学試験を…
4	紀行	鎌倉
5	紀行	太平洋の航海
27	紀行	英国歴遊
9	紀行	須磨
11	紀行	熱海
9	紀行	有馬
9	紀行	詩仙堂
7	紀行	松嶋
3	伝記	藤樹先生
7	伝記	高田屋喜兵衛
1	伝記	孟子

※内容から判断した文種別に配列した。教材題「化学試験を奏覧する解説」は「化学試験を…」と略記。以下の表でも同じ。「あり」というような連用形と終止形が同形の場合、対句になっているものは除いて、和文では「ありて」とすべき箇所や漢文訓読では「あり」とすべき箇所は終止形として扱った。

終止形に読点を付す用例には、次のようなものがある(用例中の下線は稿者による。以下同じ)

藤樹先生氏は中江、名は原、通稱は與右衛門と云ふ、其の家の前に大いなる藤ありて、屢其の下に書を講ぜしを以て門人稱して「藤樹先生」と云へり。(藤樹先生)

右の例では、主語が変わるところで文を切るのではなく、「藤樹先生」の名称に関わる内容を記した部分を一文としてまとめている。

「我熟思するに會て之を汝等に與ふべき理なし、若し理不盡に取らんとせば我は戦ふあるのみ。然りと雖、戦ふ者は必互に名乗るを禮とす、我は是近江の中江與右衛門なり。」(同)

右の例では、「盗賊に金銭衣服を与えるつもりがない」、「名を名乗る



孟子の斯く尊き人となりしは、専ら其の母が子の爲めに交はり  
 を擇び、怠りを戒めしに由り、又孟子がよく母の訓戒に従ひて  
 違はざりしに由れり。(孟子)

(4) 会話部の示し方

表3は、会話部「」の前後の表現パターン別の出現数である。

【表3】

		教材題	
		科学	望遠鏡の発明
		科学	動物の色澤
		科学	化学試験を…
		紀行	鎌倉
		紀行	太平洋の航海
		紀行	英国歴遊
	1	紀行	須磨
	1	2	紀行 熱海
		1	紀行 有馬
	1		紀行 詩仙堂
	1		紀行 松島
	3	2	8 伝記 藤樹先生
	1	1	12 伝記 高田屋喜兵衛
		1	伝記 孟子

※「曰く」を「曰はく」、「云ふ」を「言ふ」「謂ふ」「いふ」等、  
 表記の違いがあつても同一表現として扱った。

「曰く」「…」は漢文訓読的で、使用が説話的要素のある伝記の文  
 章に限られている。「云ふ」「…」には、「いふやう」「…」も含んで  
 おり、和文的表現である。「…」といふの使用は、口語文に近付  
 くことになると言えさうであるが、出現数は「云ふ」「…」と同程  
 度である。

(5) 接続の表現

表4は、接続表現別の出現数である。

【表4】

		教材題			
		科学	望遠鏡の発明		
		科学	動物の色澤		
		科学	化学試験を…		
	1		鎌倉		
	1		太平洋の航海		
	1		英国歴遊		
		2	須磨		
		1	熱海		
			有馬		
	1		詩仙堂		
			松島		
		2	伝記 藤樹先生		
			高田屋喜兵衛		
			孟子		

漢文訓読で使われる「而して」も、和文で使われる「やがて」も  
 共に使用されている。

平仮名表記の「すなはち」の例はない。

「夜は則ち燈に對して書を讀むこと怠らず」(藤樹先生)、「此の  
 液即ち變化を呈して」(化学試験を奏覧する解説)、「實業を爲す者乃  
 ち之を應用して」(同)のように使い分けがなされている。

「加之」(シカノミナラズ)は、漢文訓読の表現である。

〔6〕漢文句法の訓読表現

表5は、漢文句法の出現数である。

〔表5〕

教材題		文種	〓んと欲す	未だ〓ず	況や〓をや	豈〓や	將に〓とす	應に〓べし	〓をして〓しむ
科学	望遠鏡の発明	科学	1						
科学	動物の色澤	科学		1					
科学	化學試験を…	科学							
紀行	鎌倉	紀行							
紀行	太平洋の航海	紀行		1					
紀行	英国歴遊	紀行							
紀行	須磨	紀行	1						
紀行	熱海	紀行			1			1	
紀行	有馬	紀行							
紀行	詩仙堂	紀行							1
紀行	松島	紀行							
伝記	藤樹先生	伝記		3	1	3	2		
伝記	高田屋喜兵衛	伝記		1		3		3	
伝記	孟子	伝記							

「〓んと欲す」、「未だ〓ず」、「況や〓をや」、「豈に〓や」、「將に〓とす」、「應に〓べし」、「〓をして〓しむ」といった漢文句法の訓読表現が、ジャンルを問わず使用されている。

〔7〕過去・完了の助動詞の使用

表6は、過去および完了の助動詞の出現数である。すべての文章で過去や完了の助動詞が使用されており、それぞれの助動詞が意味によって使い分けられている。

〔表6〕

教材題		文種	過去き	過去けり	完了つ	完了ぬ	完了たり	完了り
科学	望遠鏡の発明	科学	1				2	2
科学	動物の色澤	科学						4
科学	化學試験を…	科学						3
紀行	鎌倉	紀行	14				2	12
紀行	太平洋の航海	紀行	26	17	1		7	3
紀行	英国歴遊	紀行	17	2	1		3	15
紀行	須磨	紀行	2		1			8
紀行	熱海	紀行	4					12
紀行	有馬	紀行	4		1			12
紀行	詩仙堂	紀行	8	3		1		5
紀行	松島	紀行	6	2				6
伝記	藤樹先生	伝記	19	1		5		17
伝記	高田屋喜兵衛	伝記	18	3		5		15
伝記	孟子	伝記	10					7

新保『日本普通文如何』(二三)「文法ヲ正スクスルコト」には、瞬間の現在「鳥啼ク」・永続の現在「鳥啼ケリ」・真の過去「鳥啼キキ」等を区別する時限を表す語を使用することが述べられており、精確に伝達することを目指した実践と考えられる。

〔8〕敬語の使用

表7は、敬語の出現数である。敬語の使用の有無は、文章内容に拠るものであるが、尊敬語・謙讓語・丁寧語がいずれもジャンルを問わず使用されている。「候ふ」1例は会話文中で使用されている。敬語は、全て漢字表記である。





iii その他

なお、接続助詞「イヘドモ」は、漢字表記の「雖」のみが使用され、「雖も」や「いへども」の使用はない。この点、漢文に近い。

3、新保『中學國文讀本』『藤樹先生』から三土

『中學國語讀本』『近江聖人』へ

三土忠造『中學國語讀本』には、新保磐次著と記されて、巻一に「蜜蜂」・「鎌倉」、巻二に「動植物の關係」・「須磨」、巻三に「コロンプスの大発見 上・中・下」・「松嶋」、巻四に「黄海の戦 上・中・下」が載せられている。このうち「鎌倉」、「須磨」、「松嶋」が新保『中學國文讀本』所収のものである。なお、三宅米吉著と記されて、巻一に「太平洋の航海 上・下」・「スエズ運河 上・下」、巻二に「ナポレオン 上・下」、巻四に「奈良時代の遺物の二三」があり、このうち「太平洋の航海」が新保『中學國文讀本』所収である。

右のものとは別に、三土『中學國語讀本』の教材「近江聖人」は、著者名が記されていないのであるが、新保『中學國文讀本』所収の編者作成教材「藤樹先生」と本文が非常に近似しており、新保の教材を下敷きに改変を施したと判断できるものである。

新保『中學國文讀本』『藤樹先生』から三土『中學國語讀本』『近江聖人』への文体及び表記上の改変点は、以下の通り(□↓□は、新保「藤樹先生」から三土「近江聖人」への改変例。例数の表記がないものは1例)。

a 漢文の書き下し文への書き換え(2例)

b 漢文訓読表現「に於て」、「然りと雖」、「則ち」、「日はく」(2例)の削除

c 漢文訓読体の表現から和文体の表現への改変

- ・「日はく」→「↓」「↓」と問へば」
- ・「辭して而して」→「やがて辭して」
- ・「に於て」→「のために」

- ・「未だ十歳に滿たず、早く已に」→「幼少の時より」
- ・字音表現から和訓表現へ。「平生」→「常に」、「喪し」→「失ひ」、「熟思する」→「熟ら思ふ」

和文体の接続表現へ。「多しと雖」→「多けれども」、「と」→「とて」、「に」→「にて」

・副助詞「さへ」の使用。「兼ねて」に「↓」「にさへ」  
これらは、結果として、より口語に近い、平易な表現になったと言える。

d 助詞の使用法の改変

- ・連体形に続く格助詞「の」の不使用。「避くるの法」→「避くる法」

・係助詞「は」の挿入。「藤樹幼きより」→「先生は幼きより」  
・接続助詞「て」の挿入。「相會し」→「相會して」

・連体修飾格の格助詞「が」から係助詞「は」へ。「彼が勉強倦まざるを以て」→「彼れは勉強して倦まざるを以つて」  
e 和文体の表現から漢文訓読体の表現への改変

- ・二重否定の使用。「とせり」→「とせざるはなかりき」
- ・対等中止法の不使用。「説くに、〜となりきと」→「説きしに、

〜となりき」

f 文と文をつないで、一文にする。(3例)

・「(終止形)。斯くて後」↓「(連用形)」

・「請ふ。」↓「請ひしに」

・「葬りね。」↓「葬りしが」

いずれも語句や接続助詞の追加を伴っている。

g 文を切つて、二文にする。(14例)

・終助詞の後。「況や〜をや。」↓「況や〜をや。」

・終止形の後。「難し。」↓「難し。」、「なし。」↓「なし。」、「〜とす。」↓「〜とす。」

右は、文法的に文末とすべきと判断される箇所。

・連用形と終止形が同型の場合で、文を切るもの。「り」↓

「り。」、「なり」↓「なり。」、「ず」↓「ず。」(3例)、「あり」↓

「あり。」(2例)、「然り」↓「然り。」

・体言止めとしたもの。「名詞」↓「名詞。」

・会話部の前で文を切るもの。「謂ふ、」↓「謂ふ。」

これらは、主語や主題が変わる箇所、文を切ることで、情報を整理して分かりやすくしている。

h 改段落

i 句点の削除

引用部末、「。」↓「」

j 句点の追加

倒置部の句末、「圖らざりき〜とは。」↓「圖らざりき。〜とは。」

k 読点の削除

動詞連用形の後

l 読点の追加

・係助詞「は」の後(5例)

・主題部の名詞の後(8例)

・「時、」や「後、」等、時間に関連した名詞の後(2例)

・動詞の連用形の後(3例)

・格助詞「より」の後

・接続助詞「て」の後(20例)、「して」の後(3例)、「に」の後(3例)、「ば」の後(4例)

・接続詞「然れども」の後、「雖も」の後

m 送り仮名の削除

・動詞の送り仮名を活用語尾だけに送る。「中たる」↓「中る」

(5例)、「果たさず」↓「果たさず」、

「果たし」↓「果たし」、

「管かり」↓「管り」、

「卑しみ」↓「卑み」

・ク語法は接尾辞だけ送る。「日はく」↓「日く」  
・名詞には送らない。「爲めに」↓「爲に」、名詞「志し」↓「志」、  
「教へ」↓「教」

n 送り仮名の追加

・接続助詞「雖も」(2例)

・代名詞「我れ」(2例)、「吾れ」、

「彼れ」、

「是れ」(5例)、「之れ」(3例)

o 平仮名表記

・副詞「且つ」、

「必ず」(2例)

・連語「以て」↓「以つて」(3例)

・代名詞「之」↓「これ」(6例)

・動詞「在り」↓「あり」、「立ち」↓「たち」

p 踊り字の不使用

「て」、「↓「ててて」、「ば」、「↓「ばば」

q 引用符「」の削除(3例)

r 会話文中の引用符変更『』↓「」(2例)

全体の傾向として、簡潔で分かりやすい文を作るための改変がなされていると言える。結果、漢文訓読体の要素が減じ、和文体の要素が増加している。ただし、一文化が3例に対して、二文化が14例あるなど、一文の長さは、短くする傾向がみられた。また、句読点や送り仮名の使用法、「これ」の平仮名表記、踊り字の不使用等、表記にかかわる改変は、いわば文章表記の規範を確立しようとする試みであったと考えられる。

新保の「藤樹先生」は、近世の言語文化を基盤に改変を施したのであったが、三土の「近江聖人」は、さらにそれを基としながら、簡潔で分かりやすい「普通文」への改良を試みたと言えよう。

なお、三土『中學國語讀本』では、新保磐次著と記されている「鎌倉」、「須磨」、「松嶋」において、次の改変が行われている。なお、「鎌倉」は抄出、「須磨」には句読点が全く無く、「鎌倉」・「松嶋」は一部表現が簡略化されて採録されている。

○改段落

○読点の追加

○読点から句点への変更

○名詞を並べる区切りを、読点から中点に

○送り仮名の削除

・動詞の送り仮名を活用語尾だけに ※「観せしむ」↓「観しむ」は、活用語尾も削除。

・副詞の送り仮名削除 「蓋し」↓「蓋」

○送り仮名の追加

・連語「以て」↓「以つて」、「於て」↓「於いて」、「思合はざる」↓「思ひ合ざる」

・代名詞「是れ」、「此こ」、「之れ」

○平仮名表記

・代名詞「之」↓「これ」、「此」↓「ここ」、「是」↓「これ」

・名詞「者」↓「もの」、「後」↓「うしろ」、「鹽竈」↓「しほがま」

・動詞「在り」↓「あり」

○漢字や活用の変更

・「初めて」↓「始めて」、「過ぎる」↓「過ぐる」

○係り助詞「は」の削除

○格助詞の追加。

・「〜との」↓「〜と〜との」

○地名の呼称等、情報の内容の訂正  
表記を中心に、編者の規範による「訂正」が行われたと考えられる。

まとめ

以上のような編者作成教材における文体的特徴は、近代の「普通

文」実践の一つの局面である。ここでは、漢文訓読体を基盤としながら、和文体の表現を取り入れている相が見て取れた。これは、既存の言語文化を資源として活用しながら、組み合わせたり変形したりする作業であったと言える。新しい時代の文体創造は、テクストというものが原理的に引用の織物であるように、先行する文体の組み合わせと変形としてある。

明治期の読本教科書が目指した「普通文」の拡がりや変容を捉えることが本研究の目的である。今回抽出した新保教材における文体的な特徴を基にしながら観点を設定し、明治期の中学校教科書編者の作成した教材群を分析していく予定である。

## 【注】

\*1 新保磐次は、「いらつめ」同人の言文一致運動に関わり、明治

二〇年に『日本普通文如何』（金港堂）を出版。明治一九年に東京高等師範学校の教員として採用。教科書では、明治一九年に談話体採用の小学校用『日本読本』（金港堂）の初歩第一及び初歩第二を出版、明治二八年に『中學國文讀本』（金港堂）を出版。

\*2 信木伸一「新保磐次『中學國文讀本』における「普通文」教材「藤樹先生」の典拠からの文体的変容」（『国語教育研究第六〇号』広島大学国語教育会、二〇一九年）

\*3 当該教材を、新保磐次著として採録しているものは以下の通り。

「鎌倉」：三土忠造『中學國語讀本』（明治三四年、金港堂）。  
「須磨」：三土忠造『中學國語讀本』（明治三四年、金港堂）、小

山左文二・内藤慶助『新撰國文讀本』（明治三六年、松邑三松堂）、関根正直『新選中學國文讀本』（明治三七年、育英舎）、三土忠造『訂正中學國語讀本』（明治三九年、金港堂）、関根正直・深井鑑一郎『中等國語定本』（大正元年、寶文館）、保科孝一『新編國文讀本』（昭和六年、光風館）。吉田弥平他『女子國語讀本』（明治三五年、金港堂）、明治書院編輯部『高等女子讀本』（明治三五年、明治書院）、坂正臣『女子教科國語讀本』（明治三五年、水野書院）、元々堂書房『高等女学校用國語讀本』（元々堂、明治三六年）、関根正直・古谷知新『女子國文教科書』（明治四四年、宝文館）、佐々政一『女子國文教科書』（明治四四年、光風館）。

「松嶋」：三土忠造『中學國語讀本』（明治三四年、金港堂）、池邊義象『新撰中學讀本』（明治四三年、啓成社）。元々堂書房『高等女学校用國語讀本』（元々堂、明治三六年）。（尾道市立大学）